かげろう

私の心の奥深く、もう随分前から一人の女性が住みついている。一度も会ったことはない。もう故人だから永遠に会うことはない。それなのに、まるで現身のように私に話しかける。「緑の黒髪」と表現できるような、肩までかかる長いストレートの髪からのぞく古典的なうりざね顔、切れ長の深い眼、「とても美しい」とたいていの人が感動するようなプロポーションをもっているのに彼女はいつも不満そうにうつろである。もう天に召されたのだから風となって大空に消えていってほしいのに、彼女はどっしりと私の内奥の襞に組み込まれて、夜半に目覚めて眠られない私の時間を凌駕するのだ。そうして私に囁き続ける

彼女と私の対話は、明け方の空が白みはじめるころまで繰り返し、繰り返し、続く。

――私は子供のころから対人恐怖症で死へのあこがれがあったの。小学校四年生の時に、かわいがっていた猫を家族に捨てられてしまって、悲しみのあまり登校拒否になった、さらにそのあと飼った「ミー猫」にも不本意な死に方をされ、自分を責め続けた。不登校は中学まで続き、高校に入学したものの、通えなくなり中途退学をしてしまったの。２０歳の時に服毒自殺をはかった。致死量だったのに死ねなかった――。

「

《それはあなたの最初の自殺未遂だったのね。それから何度もあなたは未遂をくりかえした、どうして子供のころからそんなにも死へのあこがれがあったの？》

――小さいころから人と会うこともしゃべることも嫌いだった、死へのあこがれ、そこには永遠の静寂がある、誰かに気を使って緊張したり、苦しまなくてもいい、死ねばきっと生きなければという試練から解放されると信じていた。何度も心療内科医師のカウンセラーをうけて、私のこのような性格は精神科専門医から「境界例」というれっきとした病名をもらっているの。特徴は自殺行為の繰り返し、他者から見捨てられるのではという極端な恐怖、慢性的な空虚感、不安定で激しい対人関係などなどであり、思春期に独りぼっちで寂しく暮らした家庭の事情もあって、私はそのすべてに一致した。通信教育の高校に入学しなおし、大学受験検定試験をうけて合格し、大学は心理学科に通ったの。すでに２０歳を過ぎていた、　その時私はエスカレーター式の人生を捨て、自分で決めていく人生を進んでいくことを自分に誓ったの――。

《そのころあなたはフラメンコに出会ったのね。》――そう、高校の時、偶然観たフラメンコの舞台に圧倒され、フラメンコ教室の門をたたいた。半年後にはフラメンコを踊ると「いうことは私のアイデンティティになり、自宅にも大きな鏡を持ち込んで絶えず踊っていを

たの――。

《一時期、フラメンコにとりこにされたことのある私にはよくわかるわ。フラメンコはロマ（ジプシー）の人たちが作り上げた踊りで、肉体的なハンディや年齢をこえて、観る人の心に「ドエンディ」（足元から突き上げて、全身を貫く魔の力）をもたらす魂の表現なの、スペインにいって、サクロモンテのロマの洞窟で彼らの踊りを見て、彼らの血に私は呼応した、でも私は所詮、極東の全く違う民族の平和ボケした存在に過ぎないことを実感した、年老いた今でもフラメンコを語るのはとても悲しいことなの。》

――フラメンコ教室に入会し、レッスンにのめりこんだ日々はとても幸せだった、心血をそそいでのめりこむものを、やっとさがしあてたのだとうれしかった、努力が報われ、数年後には教室の講師として推薦され、初心者クラスのレッスンを受け持つまで認められた、でも私が住んでいる東海の地方都市でのフラメンコのレベルが、東京のレベルには全く通じないことを体験して、自信喪失し、それがストレスになって、やがて踊ることができなくなってしまった、丁度同じころ、１０年間、魂の伴侶と信じ、愛し続けてきた婚約者から破局を申し渡され、アルコール漬けになり、絶望のどん底に突き落とされ、生きていくのが辛くなったの――

「

《そうして何度目かの自殺未遂をしたのね。３１歳で乳がんになり、治療を拒否してあなたはそのまま自然に死を迎えることを選んだ。熱心に治療を進めてくれた主治医に次のような手紙を書いた。（略二年前まで私はフラメンコダンサーで、カルチャーで講師もしていました。でも愛し続けてきた男性が私から去っていき、踊ることもできなくなり、今はいつ死んでもいいと思っています。子供のころからそう考えていて、実際に何度も死のうとしました。今はただ自然のなりゆきにまかせるだけです）

《とはいうものの、恵まれた家庭に育ち、あなたを愛してくださっているご家族のことは考えなかったの》

――母は私の目の前で、手首を切って自殺しようとしました、父は仕事でいっぱいだったし、私と母は同じ穴のムジナなのよ――。

彼女はニッと笑って長い髪をかき上げた。窓が白くなっていった。彼女はかげろうのように私から去っていった。彼女の名前は「宮田美乃里」

２００２年１２月、宮田美乃里３１歳の時、毎日新聞東京版に投稿した彼女の以下の要旨の文章が波紋を呼んだ。繰り返しになるが引用する。

「魂を

「２年前、心から愛した男性から婚約を破棄された、それまでフラメンコダンサーとして舞台にたっていたが、体調を崩して踊ることができなくなってしまった、その後２０歳のころに作っていた短歌が再び浮かぶようになり、悲しみを歌にすることで気持ちの整理をし、歌集『花と悲しみ―魂の軌跡』を出版した、丁度その頃、左胸にしこりを発見し、検査をしたが、結果は乳がんだった。複数の病院を回り、乳房温存手術を希望したが、大きさから言って不可能だと知った。最善を尽くしても５年生存率は６割だと言われた。周りの人たちは頑張る様にと励ましてくれている。しかし、もう疲れてしまいました。人生悲しいことばかり、今は静かに自分を見守っていきたい」

がんの治療放棄の投稿に読者の反応は多様で新聞社の担当記者がインタビューに訪れたり、その後、ネットや全国紙面を賑わすまでの話題になった。彼女が選択した「治療を受けない」ということに対する批判よりも、同情と激励のほうが多かったという。

この記事を読んだ「リヨン社」から出版の要請を受けて宮田美乃里は自伝ともいえる『乳がん私の決めた生き方――限りある命を花のように―』を書いた。小、中、高校を通じて不登校となり、恋をしては破局を繰り返し、数回に及ぶ自殺未遂の末に３１歳で乳がんを発症し、進行して皮膚が破れ、傷口が化膿して膿が出てきたので、患部だけを切り取り、を

抗がん剤などの治療を放棄するにいたるまでの心理が克明に書かれている。そして２００５年春、癌は全身をむしばみ、３４歳の生涯を閉じた。

私の目の前に一冊の写真集がある。表紙の右半分には咲き誇る深紅の薔薇、もう片方には紫色に変質し、しおれかかった薔薇である。大判の写真歌集の表題は『乳房、花なり』。荒木経惟と宮田美乃里の名前が並んでいる。撮影者は、過激な裸体写真で毀誉褒貶のあるアラ―キーである。歌人と自称する宮田美乃里の、和紙に書かれた短歌、そして荒木によって撮影された彼女の着物姿とヌードの写真がコラボして美しい装丁である。本の背表紙には次のように書かれている。「３１歳の時乳がんを告知され、３２歳で左乳房を全摘出した私が、ヌードになった理由はただ一つです。乳房を失っても私は女であるということを世の中に示したかったのです。（略）私は胸の傷あとも、痛みも、悲しみも、すべてを自分の誇りだと思っています。だから、世の中にさらしたとしても恥だとは思いません。私は一輪の花、いいえ、すべての女性が花であるのです（略）。」

そして本の帯には次のような詩的な文章が寄せられている。

「廃墟から立ち上るのは写真家のエロスと不具の一輪の花。乳がんで乳房を切り取った魂を

「女たち　夜風にゆれる野の花となれ　がんであることを支えに生きている私の瞳に夕陽がゆれる（略）わたくしが女であるということを切除されたる乳房が語る　捨てられた痛みの残るこの胸にメスの傷跡くっきり浮かぶ　生きている私に触れて今朝咲いた桜のように濡れているから　転移したがんの痛みが来るように桜の花はただ降りしきる」

宮田美乃里は、着物姿で海辺に立ち、長い髪を風になびかせている。あるいは海辺の小石を拾っている。次のページでは両腕を頭の上にかざし、手術をして片方の乳房の亡くなった胸を誇らかにさらしている。全身を写したヘアーヌード写真は同性の目からみても息をのむ美しさだ。原色の生気ある花々と、しおれてうなだれた茶褐色の花々。

私は写真集など買ったこともなく、まして有名人とも言えない見知らぬ女性の写真集など、本来なら関心がないはずなのに、この本を手に入れるべく努力をした。書店に問い合わせても出版元に在庫はなく、結局ネットのアマゾンでやっと見つけることができた。癌に侵されているとはいえ、この時期の美乃里は全体的に肉付きもよく、豊満な肉体は、左胸に横一本、大きな傷があるだけに、なおさらエロチックである。随所に挿入されている彼女の短歌は、感銘するほどの作品はなかったが、肉体の美しさには圧倒され、何度もページをめくった。

「

なぜわれは生きねばならぬと白鳥に
　尋ねてみても冬の海鳥
胸深し傷より涙あふれいず
　時雨に溶けて涙ぬらさん

『乳房、花なり』は、宮田美乃里が、乳房を失った自分のヌードを撮影してくれるようにと荒木経惟に直接依頼して完成したものである。荒木はすぐさま引き受けて、２００４年冬、彼女の郷里の静岡の海辺で撮影した。彼にとっても申し分のない被写体だったのだろう。深紅に咲き乱れる毒々しい花々に比べ彼女の裸体は静謐である。素人の、無名の女性であるだけにその美しさが胸を打つのだ。自分を破滅させることによってしか生きられなかった「おんな」の悲しみが写真の中からあふれてくる。まさに風雨に朽ちていく野の花である。３４歳で逝った彼女の人生を思い、破局への渇望に浸り続けた性（さが）をわがことのように切なく感じて、同化していく自分をおさえることができないほど胸に響く写真集であった。

「

作家森村誠一は、友人の写真家荒木経惟が寄贈してくれた一冊の写真歌集『乳房、花なり』を受け取ってページをめくり、全身が震えるような衝撃をうけた。癌におかされ、余命を宣告されている宮田美乃里という女性が被写体である。乳房を切除してもなお自分は女であることの存在証明を刻むために、荒木のカメラの前に裸身をさらした美乃里。森村は言う。「カメラによって定着された彼女の裸身は、生死の境界を漂流するものの壮絶な輝きに彩られていた。（略）私はその時、この歌人がこの世にある限り、彼女を小説の形で書き留めておきたいという、猛烈な衝動をおぼえた。それは彼女を書かなければ、作家になった意味がないと思い詰めるほど切実な衝動であり、作家の業のようなものであった。私は直ちに荒木氏に連絡を取り、歌人に会いたいと言って了承をえた。新幹線で東京から２時間ほど西の、東海の地方都市に彼女は住んでいた。私の来訪を喜んで迎えてくれていたようだったが、取材が進むにつれて宮田氏の消耗は激しく、荒木氏のカメラの前で全裸にされ、私のペンで内臓まで解剖されるような気がするといった。毎回が、一期一会の取材であったが、私にしてみれば、もはや助からぬ命であるならば、少しでも多く存在証明を世に残したいと執拗に取材をかさねた。宮田氏との限られた命との競争であった。会うたびに彼女の病は重篤になり、９月に初めて自宅を訪問して以来十余回、２００５年３月、魂を

桜が開花する寸前に帰らぬ人となった」

森村誠一は宮田美乃里を取材してモデルにした小説『魂の切影』を、２００４年から２００５年５月号まで『宝石』紙上に連載する。主人公は、「山吉雅樹」という小説家であるが、作者、森村の分身であることは明らかだ。モデルの女性も「宮田美乃里」と本名で書かれている。ほとんどドキュメンタリーのような形式だが、彼は美乃里そのものを再構築するのではなく、美乃里をふまえて新しい人間を作品の中に創造したいと言っている。山吉のレンズを通しての美乃里の虚構と実像の合成であろう。

『魂の切影』は、山吉が妻を癌で亡くし、すべてに投げやりな気持ちになっている時、友人の写真家荒木経惟から分厚い写真歌集を贈られたところから始まる。彼は、海辺に立って遠くを見つめる悲しげな女性の姿に、亡妻の面影をみて愕然とする。なぜここに妻が？しかし左乳房をえぐりとられ、胸の半分を痛々しい傷痕が横切っている裸体は妻ではなかった。随所に挿入される短歌、それは写真家荒木と、歌人宮田が歌と写真によってエロスとタナトスの相聞歌を歌いあげていた。山吉の作家魂が破裂した。妻の化身のような美乃里の上に、かって、彼の上を通り過ぎていった幾人かの女性を重ね合わせ、彼女の余命を

「魂を

文章で刻み込んでいきたいと熱望する。
彼はさっそく荒木に電話をして宮田に連絡を取り、取材の申し入れをする。
魂の切影前に声もなし
わが作品は何であったか
宮田は取材に応じ、山吉は彼女の人生を刻むべく、東海の海辺の街にある彼女の自宅を訪問するのである。
「フラメンコダンサーだったそうですね。」
「はい、初めてフラメンコの舞台を見終わったとき、私は席を立ちあがることができなかったほどの衝撃をうけました。即座にレッスンを受けたいと思い教室に通いました。その時からフラメンコを踊ることは私のアイデンティティとなったのです。教室の講師になるレベルにはなったのですが、地方に住むことは決定的なハンディで、東京のレベルについていけないという不安にかられ、自信を失いかけたころに婚約者から破談を申し渡されました、今はただ歌によって救われています。フラメンコは努力をしないと踊れませんが、歌は無意識のうちに歌のほうから降りてくるのです」
「すでに死の彼岸に軸足を移していた彼女を生の彼岸につなぎとめていたものは短歌の力

であった。

美しき三十路鏡をのぞきたる
わが瞳に映る　魂の軌跡（あと）

山吉がベッドサイドに立つと、うとうとしていた美乃里が眼を開き、にっこりと笑う。「あなたがあなたである間に、あなたの意思で裸身が見たい」と思わず山吉は口走る。「先生にはもっと早くお見せしたかったわ」彼女はためらうことなくベッドの上で裸身をさらした。「神がその完成美に嫉妬して故意に一部を破壊したような傷跡が、むしろ彼女の美質を高めているかのように山吉を圧倒した。」荒木がきり取った「魂の切影」は、いまや影ではなく実体として彼の眼のまえにあり、それは健康な女体には決してない凄惨な迫力であった。彼は思わず唇に触れた。美乃里は感電したように全身をふるわせた。病魔に侵された体にそんな感度が残っていることは驚きであった。

或る時、飛騨高山のお土産の人形をもって訪ねたとき、「私も高山に連れて行ってください」とせがまれる。何気なく「いいでしょう」と返事をしたのだが、その後何度か催促をされ、彼女を連れていく決心をする。医療器具を携え、車いすに乗った重病の彼女を案内することは並大抵のことでは無かったが、彼は約束を守り、決行する。

「魂を

想い出の破片探すや夕まぐれ

飛騨高山の古き街角

美乃里は飛騨の古い街角の夕暮れに溶けていくようであった。美乃里の母が同行したのだが、宿では美乃里の希望で、山吉は彼女と同じ部屋で一夜をすごす。「私、先生のおかげで高山に来られました、もう思い残すことはありません。私のすべてをさし上げられなくてごめんなない」「すべてをいただいています。これ以上のすべてはありません。」

「先生、キスをして」美乃里は自分のほうから求めてきた。二人は唇を重ね、手をつないで一夜を過ごした。　それは二人の「官能の隔壁を突き抜けた」深い契りであった。

山吉は自分が美乃里にとって最後の男であったと自覚する。彼はほかの男たちのようにただ通過するだけではなく、彼女の精神の襞の奥にまで踏み込んだのだ。高山以後、山吉の訪問頻度は多くなっていった。美乃里の体調は次第に厳しさをましていった。

彼は最後の「存在証明」として彼女のアイデンティティであるフラメンコを踊らせることを思いたち、スタジオを用意した。自信がないとしり込みする彼女を奮い立たせ、生きる喜びを全身で表現する曲「アレグリアス」を踊った。全身を癌細胞で侵されているはずの美乃里が、ギターとカンテに支えられてフラメンコの精と化した。藍に白い水玉を散らせた

「魂を

したドレスが宙に舞い、美乃里は天上に飛翔する天女のようであった。
余命は燃焼しきった。彼女のエキセントリックな性格と、会う人をひきつけずにはおかない美貌が小説を華やかに彩った。

はかなくも　美しきかな　ひとひらの
桜この世の　幻のごと

長編小説『魂の切影』のエピローグで森村誠一は、「永遠の恋人（モデル）宮田美乃理氏哀悼」という一文を付記した。要約すれば次のように書いている。
「『魂の切影』は『乳房、花なり』と共に、宮田氏の慰霊の書であると同時に、その存在証明でもある。彼女に出会わなければ、この作品を書くこともなかった。わずか数か月、十余回の出合いであったが、私にとって彼女は永遠の恋人（モデル）となった。もはやこのような恋人に出会うことはないであろう。」
小説の最終回を宮田美乃里の四十九日の仏前で朗読しながら、「春が巡り来るつど、彼女がこよなく愛した満開の桜に、その面影を重ねるであろう自分を思った。」と述べる。これはまさに作家森村誠一と作中人物山吉雅樹がオーバーラップし、「宮田美乃里」に対しての「魂を

強烈なオマージュであり、ラブコールであろう。

「この特集は一期の歌人宮田美乃里が病床で読み続けた未発表の歌であり、余命のすべてを燃やした火花である。死の彼方に軸足を賭けた歌の心の内奥は幾重にもバリアがはりめぐらされ、到底立ち入ることのできない領域であるが、作家としての特権を最大限にいかして不可侵の領域は私の想像力が補い、ただ一人の運命の異性をもとめて、３００年の時空をさすらう永遠の恋人を描いた。」とも述べている森村はその後、『運命の花びら』（２０１５年出版）で３００年の時空をかけて恋人を探し求めるロマンを書いている。

《あなたにとって森村誠一という作家はどんな存在だったの》――最初はとまどったの、突然現れて、私が生きていることの存在証明を小説にしたいって、人はその一生において様々な出会いをするけど、運命の出会いはそれほど多くはない、これほどのモデルに出会えたことは自分の寿命を縮めてもいいほどのことだと思ったって。私は裸体写真を撮ったときも、私が生きていたという証明を残したかったのだから、喜んでお受けしたの、取材は私の過去を他人によってあからさまにされるようなものだから、うれしくない部分もあったけど、森村先生はとても魅力的な方だったとおもう――。

「

《そうしてお互いに恋が芽生えたというわけね、飛騨高山でキスをしたのでしょう》

――2年前に出会ったら恋人同士になれたでしょうかと聞かれて、なれたと思いますと答えた、先生のためにもう少し生きていてもいいとさえ思ったの。もちろん私の病状から言って不可能な事だったけどー――。

《あなたの破壊願望は自分が消えることによって、自分の存在をより強く主張するという自己顕示欲があってのことなのね。結局はナルシストなのよね。あなたはフラメンコダンサーだから髪を失うわけにいかないことを治療放棄のひとつの理由にした、フラメンコはただ優雅で艶があるだけではだめで、観るものをなぎ倒すほどの迫力や気迫が要る、それを身に染みて知っていたのに、薄っぺらな技術の「限界」という隠れ蓑で壁を突き破ることをしなかった、どうしてあなたは片方の乳房を切り取った傷を誇らかにさらして、スペインのサクロモンテのジプシー村に行き、ロマの人たちと同化して、肉体が粉々になるまで踊って、踊って、魂を燃焼させて、アンダルシアの闇の中に消えてしまわなかったの、それがあなたにふさわしい最期だと、どうして思わなかったの。

一人の人間がどう死んでいくかは本人の判断にまかされることだけど、周りとのかかわりで生きている以上、生死さえその人だけのものとは言い切れない部分があるの、あなた

はそうして現実にいなくなった今も、ご家族はもちろん、私や、私と同類の人たちとの夜を共有し、いつまでも生き続ける―》

――私はフラメンコで燃焼し、そのまま息絶えたのだから、私の魂はアンダルシアの光となって真っ白な家々を照らし続けるの、ロマの女たちの瞳の中に私は再生する。そしてあなたは、長ったらしい人生を、四季温暖な自然に囲まれ、おばあさんになるまで生きてきて、のんびりした顔をしているけど、私にも、そう、そんな選択もできたのよね。子供を産んで、家族の愛に、なんて、私はもしかしたら急ぎすぎたのかもしれない、人生、ある時期の苦悩をのりこえれば、ニュートラルな日常が限りなく続く、でも、もういいの。これが私の選んだ生き方だし、死は神様の許しなのだから――。

スミレにはスミレの美学あるならば

誰もわたしを規定できない

彼女はニッと笑って暁の光の彼方にかげろうのように消えていった。

夜ごとにつきまとう宮田美乃里の幻影は、やがて私の愛する二人の娘と一体化する。彼女たちは、美乃里と同様の病気を患っている。二人とも家庭を持っているので、髪を、乳を

「

「

房を失っても、家族のため、そして母である私のために生きなくてはならない。美乃里の母が常套句のように言っていた、「ミーちゃん、最大の親不孝は親より先に死ぬことなのよ、このことは忘れないでね」という言葉は切ない。その心情に私は深く、深く心を打たれるのである。

（２０１８年　３月）

森村誠一（１９３３～）は『高層の死角』でデビューし、『人間の証明』『悪魔の飽食』など話題作を書いた。その他推理小説、時代小説など多数。

参考資料

『乳がん私の決めた生き方』リヨン社　宮田美乃里

『魂の切影』光文社　森村誠一

『乳房、花なり』ワイズ出版　宮田美乃里　荒木経惟

「